“誰も置き去りにしない”
生き抜く力にあふれた
子どもたちを育むために

インフォメーション

心に届けるおすすめコンテンツ

ホームページで「講演動画」公開中！

ニッケ教育研究所 ビデオギャラリー

教師の皆さまへ 模擬授業形式の特別講演

「教師の日常改革」

授業が変われば
学びが変わる！
子どもが変わる！

〈講師〉関西学院初等部 教諭 森川 正樹 先生

スマホから、ご視聴いただけます

「授業で勝負する」ためのヒントは、
子どもたちとの何気ないやりとりの中にある———
気づきを実践につなげられるお話です。ぜひ、ご覧ください！

動画の
ご視聴は
こちらから

一般会員募集

私たちと一緒に、「子どもたちが生き生き伸び伸びすごせる環境づくり」に参加していただけませんか？
子どもたちは“未来の宝”です。私たちが発信する未来の宝を育む情報を、学校・家庭・地域で是非ご活用ください。入会のお申し込みは、ホームページでご案内しています。

編集後記

今、この瞬間に世の中で起こっている事象は、大人も子どもたちも皆が等しく初めて経験していることです。このような初めての経験に対応していくためには、自分の感情をいったん横において起こっている現実を素直に理解し、改善したい状況や解決したい課題を見極めて、解決する方法や行動を深く考え実行することが大切だと感じています。

子どもたちにとって、このような場面をたくさん経験することが「乗り越える力」を高めることにつながりますし、「乗り越える力」のある人がいる環境に身を置くことが「考え・伝え・交流していく力」の習得につながると考えます。私たちは、子どもたちにこのような環境を作れるように、現実から目を背けず未来に夢を持って日々を過ごしていきたいと思います。

一般社団法人ニッケ教育研究所
理事長　楠本　景央

FOLLOW US!

未来Watch みらいウォッチ
2024 冬号（年４回発行） No.16
2024 年 1 月 20 日 発行
本紙掲載の記事は、複写・複製・転載を禁じます。

《発行》 一般社団法人ニッケ教育研究所
〒541-0048 大阪市中央区瓦町３丁目 3-10
TEL: 06-6205-6665 https://nikke-edu.org/

2024 冬号
2024 年 1 号 No.16
ニッケ教育研究所 会報誌

未来Watch みらいウォッチ

生き抜く力にあふれた子どもたちを育むコミュニティー

特集

未来につなぐ学校づくり 第１回

小中一貫校開校２年目の挑戦

～「生きる教育」を通して学び続けることができる職場～

私がつくる子どもの笑顔 第 12 回

子どもの「心音（こころね）」を聴き、生きる力の基にある「心根（こころね）」を育てる

～「明るく 正しく たくましく」を目指して～

連載コラム 第１回

レジリエンスの構築に向けて

－今、求められる「乗り越える力」－

インフォメーション

心に届けるおすすめコンテンツ

※写真は北アルプス（長野県安曇野市）です

一般社団法人
ニッケ教育研究所
NIKKE Institute of Education

未来につなぐ学校づくり

子どもたちは、やがてより広い社会との関わりを持っていくことになります。その未来を輝かせるために、必要な力を身につけておくことが大切です。ここでは、中学生世代の子どもたちの教育について、現職の校長先生に考え方や具体例を紹介していただきます。

第1回は、田島南小中一貫校の今垣清彦校長です。

第1回 小中一貫校開校２年目の挑戦
～「生きる教育」を通して学び続けることができる職場～

《田島南小中一貫校　大阪市立田島中学校　大阪市立田島南小学校》 今垣（いまがき） 清彦（きよひこ） 校長

児童生徒数が減少する中、2022年4月、田島小学校と生野南小学校が統合され、田島南小学校となり、田島中学校の敷地内に新設されて、施設一体型の田島南小中一貫校が誕生しました。

私は田島中学校の教頭として２年勤務した後、小中一貫校の副校長となり、2023年4月に校長として着任しました。小学校の統合、小中一貫校の開校はエネルギーを要し、困難なこともたくさんありました。しかし、目の前の子どもたちに何ができるのかを考え、全教職員とともに取り組んできた開校２年目の挑戦を紹介します。

特色ある教育活動『４つの柱』

- 性・生教育の推進
- キャリア教育の充実
- 言語力の育成
- 読書活動の充実

「生きる教育」の授業を通して、レジリエンスを高める

本校の取組には４つの柱があり、それらを軸に教育活動を進めています。どれも特色があり、すべてを紹介したいのですが、紙幅の都合上、４つの柱の中でも大黒柱的存在である「性・生教育の推進」について紹介します。

「性・生教育の推進」については、旧生野南小学校で研究・実践してきた独自の教育プログラム「生きる教育」を基に取り組んでいます。なお、2023年度の全市公開授業で実施した内容は、右の表のとおりです。

「生きる教育」は、子どもにとって一番身近であり、社会問題とも言えるテーマを授業の柱とし、どの子にとっても学びとなるように作られています。心の傷に直結しやすいテーマを授業の舞台にのせ、示された「人生の困難」を解決するために必要な知識を習得し、友だちと真剣に話し合うことで安全な価値観を育んでいきます。授業の力で子どもたち相互にエンパワメントを生み出し、個のレジリエンスを高めることをめざしています。

「生きる教育」9年間教育プログラム（2023年9月29日、30日公開）

学年・組	テーマ	内容
1年1組	大切なこころと体	プライベートゾーン
1年2組		たいせつなぼく・わたし
2年1組	みんなむかしは赤ちゃんだった	ちょうどよい「きょり」
2年2組		妊婦さん・抱っこ体験
2年3組		「赤ちゃん」のふしぎ
3年1組	子どもの権利条約って知ってる？	こちらお悩み相談室
3年2組		大切な権利ランキング
4年1組	10歳のハローワーク ～LSWの視点から～	ほしい力オークション
4年2組		考えようみんなの凸凹
5年1組	愛？それとも支配？ ～パートナーシップの視点から～	これは愛？支配？
5年2組		みんなで考えるオンラインルール
6年1組	家庭について考えよう ～結婚・子育て・親子関係～	心の傷の治療法
6年2組		子育て実技体験
7年1組	「脳と心と体とわたし～思春期のトラウマとアタッチメント～」	
7年2組		
8年1組	「リアルデートDV ～支配と依存のメカニズム～」	
8年2組	思春期における情報モラル教育	
9年1組	社会における「子どもの権利」	
9年2組	「社会の中の親と子～子ども虐待の事例から～」	

授業後の子どもたちの感想では、

> 自分には素敵なところがないと思っていた。だから自分のことは大嫌いだった。でも、「生きる」学習をして、生きることは素晴らしいと思った。〈小学生〉

> 心がけているのは、他人の人生を自分の考えで決めないこと。「生きる教育」は、絶対必要な人生の教育。〈中学生〉

など、一人ひとりが自分ごととして考えていることがうかがえます。

8年生

2年生

9年生

「生きる教育」が生まれた背景、そして今につながる

「生きる教育」は、12年前に生活指導課題克服というニーズから研究が始まりました。人権教育、トラウマ研究、国語科を中心とした教科指導研究など、多岐にわたる分野をつなぎ、徹底した教材研究のもと６年前に作られました。そして、大学教授をはじめとする各分野の専門家の方々との長年にわたる協働のもと、毎年ブラッシュアップし続けている教育プログラムです。

「生きる教育」の授業は、教科横断型であり、今求められている思考力・判断力・表現力を鍛え、認知能力と非認知能力の双方がバランスよく育成されるものとなっています。そういった意味で、新しい時代にふさわしい教育プログラムであると思います。

小中一貫校開校の２年前から小中で連携し、協議を重ね、中学校で授業実践を行ってきました。その結果、開校初年度から、１年生から９年生まですべての学年で授業実践および全市公開することができました。このことは開校したばかりの学校の、教育の方向性を明確にする意味からも大きな成果だと考えています。

「生きる教育」の研究を通して、教員の授業力を高める

本校の経営方針の１つに「教職員が働きがいのある職場づくり～学び続けることができる職場～」を掲げています。そして「生きる教育」は、本校教職員の学びの起爆剤であると思っています。

「生きる教育」の指導案は、毎年ブラッシュアップさせる必要があります。なぜなら、社会問題ともいえるテーマを授業の柱とするため、社会の変化に対応する必要があるからです。子どもたちにとってリアルであることが魅力ある教材になり、学びを深めることにつながるのです。例えば、８年２組の「思春期における情報モラル教育」では、若者たちに人気のあるテレビ番組への出演がきっかけで、SNS上での誹謗中傷を受け、自死し、大きく報道されていたことを教材として授業を組み立てました。簡単に教材として取り上げられるテーマではないため、大学の専門家とも協議しながら、指導案を練り上げていき、模擬授業、プレ授業を通して、修正を加え、公開授業となります。公開授業へ向けて、最高の授業を作り上げようという“熱”こそが、若手教員が多い本校にとって、大きな学びとなり、授業力を高めると確信しています。

おわりに

「VUCA」時代と言われ、今ほど教育に対して、変化を求められている時代はありません。子どもたちのウェルビーイングの向上のため、教職員とともに私たちがすべきことは何か、今できることは何かを常に考え、すべての子どもを主語にした教育を実践してまいります。

私がつくる 子どもの笑顔

子どもたちの元気な声や輝く笑顔にあふれた学校をめざし、現場ではさまざまな創意工夫が活かされています。ここでは、小学生世代の子どもたちの教育について、現職の校長先生に考え方や具体例を紹介していただきます。
第12回は、大阪市立太子橋小学校の栗山 功校長です。

第12回 子どもの「心音（こころね）」を聴き、生きる力の基にある「心根（こころね）」を育てる

～「明るく　正しく　たくましく」を目指して～

《大阪市立太子橋小学校》　栗山（くりやま） 功（いさお） 校長

本校は、1949年に創立された歴史と伝統のある小学校です。教育目標の「明るく　正しく　たくましく」は、現在まで脈々と引き継がれ、本校教育の基盤となっています。また、日々の教育活動を通して、重点目標である「豊かな心と自ら学び、自ら考える力を育てる」を実践しています。聖徳太子が訪れたと伝えられる太子橋の地域で育まれた子どもたち一人ひとりが、将来への夢をもち、その夢を実現してくれることを願っています。

「心音」を聴き、「心根」を育てる

こころね・・・。一度、声に出して読んでみてください。なんとなく穏やかな響きに聞こえませんか？‘こころね’は「心音」「心根」という二つの漢字で表わします。

「心音」とは心から聞こえてくる音のことです。もしかすると周りの友達が、小さな心の音でSOSを出しているかもしれません。そんな小さな「心音」を聴き、友達を助けることのできる子どもたちを育てたいです。そのために、私たちはそのわずかな「心音」を聴きのがすことなく、子どもたちに寄り添うことが大切だと思っています。

「心根」とは、まさに心の根っこのことです。言い換えれば、自己肯定感、主体性、協調性など、自分らしく生きていくために必要なものだと考えています。私は６年間の小学校生活を通じて、子どもたちの心の根っこをしっかりと育てたいと思っています。心の根っこのしっかりとした人は、友達をいじめたり、自分に自信をなくしたりしないと信じています。未来にはばたく子どもたちへ・・・やっぱり大切なのはこころね！

つけたい力を明確にした授業計画

2023年度より国語科について研究を進めており、すべての学年が授業研究会を行っています。

研究テーマ

自分の思いや考えを豊かに表現し、ともに学び合う子どもの育成

～物語の魅力を語りたくなる授業づくりを通して～

そこでは、子どもたちが登場人物の心情変化を捉えることを通し、読みの力をつけられるように取り組んでいます。つけたい力を明確にし、授業を計画することによって、子どもたちが主体的に学ぶようになる様子が見て取れます。「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けて、着実に研究成果をあげていることを嬉しく思っています。

生きる力の基にある「心根」を育てるためには、生きて働く本当の学力、即ち、社会での生活や仕事に役立つ学力を確実に身につけさせることが大切だと感じています。

集団登校・にこにこ班活動

高学年に学校のリーダーとしての自覚を持たせることを通し、彼らの自尊心を育むことを目指しています。それゆえに、集団登校で低学年をお世話している6年生の姿を見ると頼もしく感じます。

また、異学年の交流活動にも力を入れてきました。「にこにこ班」という縦割りグループ活動で、1年生に接している時の6年生の姿を見ていると、とても微笑ましく思います。加えて、6年生は単なる1年生のお世話係ではないと思っています。実はこの活動は、1年生のためというよりは6年生のために大いに効果を発揮します。6年生が1年生と接することで、同じ学年の友達と接している時には決して感じることができない自尊感情が高まり、より成長していくからです。また、1年生にとっても６年生が憧れの存在になり、「自分たちが6年生になった時にはあんな風になりたい」という感情が生まれます。長いサイクルで育成を捉えることで、学校全体がより良い方向に進んでいけると考えています。

支援学校との交流

学年ごとに、校区の近くにある支援学校との交流会を開催しています。一緒にゲームをしたり、玉入れをして遊んだり、運動会の演技を交互に見せ合ったりして交流を深めています。さらに本校の作品展に、支援学校小学部の作品を展示するコーナーを設けるなど、交流の場を広げています。

そのような取組の中、5･6年生の交流では支援学校の友達の演技に自然と手拍子が起こり、運動場全体が温かい雰囲気に包まれました。４年生の交流ではグループをつくるゲームを行い、支援学校の友達と仲間なって一緒にグループづくりをしている様子が微笑ましかったです。交流会では、2年生の児童が支援学校の友達の演技を真剣に見て、「むずかしいふりつけを、さいごまでおぼえてすごいなと思いました」と感想を話していました。

どの学年も、両校の子どもたちにとって有意義な時間にすることができました。このように、毎年、創意工夫を凝らした交流活動を行うことにより、子どもたちにやわらかな「心根」を育てています。

充実のビオトープ

本校には、ビオトープ（意味：生物生息空間）があります。理科の学習に使うだけでなく、朝の時間などは地域の方々との交流の場となっています。学習園としてさまざまな植物を育てていますが、秋にはキウイやビワや柿など果物の木が実をつけます。冬になると、ビオトープの池に氷が張ることがあります。低学年の子どもたちは楽しそうに氷を手に取り、冷たい季節を実感します。自然を身近に体験できるビオトープは、「自然と触れ合い、楽しむ大切な心」を育てるのに役立っています。特に低学年の子どもたちはビオトープが大好きです。毎朝、たくさんの子どもたちが、ビオトープで楽しい時間を過ごしています。

おわりに

変化の激しい社会のなかで、困らないだけの「生きる力」、どんな状況にも対応できる「思考力」「判断力」「表現力」をつけさせるには・・・。「自分のことが好き」と思える自己肯定感を高め、周りの人も大切にできるやさしい心を育てるには・・・。

答えはひとつではなく、その実践も簡単ではないと思います。それでも、子どもにとって良いと思うことには全教職員で力を合わせ、一致団結してチャレンジしていきます。「わかりやすい授業」を目指して授業改善することはもちろん、子どもたちに自学自習する力をつけさせたいと思っています。また、自分の考えを声に出して表現し、友達と交流することを通して「協働的な学び」を充実させることにも積極的に取り組んでいきたいと思っています。

最後に・・・太子橋小学校の子どもたちは私の自慢であり、誇りでもあります！

第1回 レジリエンスの構築に向けて

― 今、求められる「乗り越える力」―

《ニッケ教育研究所顧問》 勝本（かつもと） 孝夫（たかお）
元・大阪市立榎本小学校校長（鶴見区）
元・大阪市立姫里小学校校長（西淀川区）

「現実課題をいかに克服するか」を考え、行動に移す時、試練や困難に立ち向かっていくことが必要です。変化が激しく先行き不透明な時代にあって、「レジリエンス（困難を乗り越える力）」の発揮が求められるのは、そのためではないでしょうか。

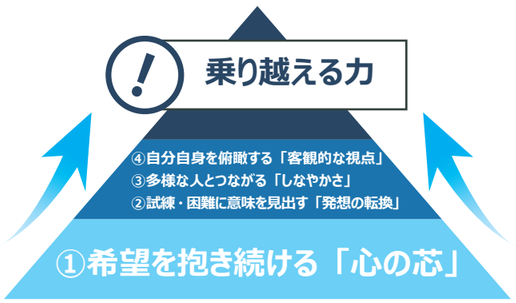
ここでは教育現場で得た知見をもとに、レジリエンスを生み出す要因について考えていきます。今回は①をお話いたします。

「乗り越える力」を生み出す４つの要因

1. 希望を抱き続ける「心の芯」
2. 試練・困難に意味を見出す「発想の転換」
3. 多様な人とつながる「しなやかさ」
4. 自分自身を俯瞰する「客観的な視点」

1 希望を抱き続ける「心の芯」

「乗り越える力」を生み出すためには、4つの要因を具体的なイメージとして思い描くことが大切です。私はそれを常に意識しながら、現実課題に挑戦してきました。実は、この4つの要因が“心のエネルギー”となり、さまざまな試練や困難を乗り越えるために必要不可欠だとの考えに至りました。このことに気づかせてくれた、学校・家庭・地域の皆さま、そして子どもたちに感謝の気持ちでいっぱいです。



『夜と霧』との出会い

3年余りのコロナ禍の中で、静かなブームを呼んだ本があります。それは『夜と霧』という名著で、著者はアウシュビッツ強制収容所から奇跡的な生還を果たしたヴィクトール・E・フランクルです。実は、私が教師になった時に先輩から薦められた本でもあります。「念願の教師になったのだから、人の精神の偉大さ・尊厳性を描いたこの本をぜひ読むように」と言われ、座右の書のひとつになっています。

ユダヤ系の精神科医だったフランクルは、強制収容所でこの世の地獄と思えるほどの苦しみを味わいます。そこでの出来事は、人間を「無感動」「無関心」「無感覚」にしてしまうほど過酷なものでした。しかし彼は生と死のぎりぎりの極限状態を生き抜き、奇跡的に生還するのです。では、なぜ彼は生き抜くことができたのか。ここに、先が見えない不安の時代に生きる我々にとってのヒントがあると思うのです。

精神科医だったフランクルは、冷静な視点で収容所での出来事を記録しました。また、過酷な環境に置かれていた人たちが、何に絶望し、何に希望を見出したのか、その精神状態を克明に記録しました。そこから「生きる意味」を学び取ろうとしたのです。私は、「この記録が誰かの生きる力になる日が、きっと訪れる」と彼が信じていたのだと思います。そして、**「自分を待っている人がきっといる」「必ず誰かが待っている」**と強く信じ、「極限状態に置かれていることにも意味がある」と悟ったのだと思います。この本が時代を超えて人をひきつけるのは、ナチスの残酷さの単なる告発ではなく、どんな状況下でも生き抜く力となる「精神の偉大さ・尊厳性」を描き出しているからではないでしょうか。

心の芯

教育現場に次々に押し寄せる課題に悪戦苦闘しているのは、「いつの日か出会う誰かのため」である。今ここで経験していることは、将来きっと生きてくる ――― 『夜と霧』との出会いにより、私の中に“心の芯”が生まれました。人生すべてが順風満帆というわけにはいきません。試練の時が訪れ、さまざまな困難に遭遇します。しかし、それらを**乗り越えた後にこそ、人生の真の醍醐味や充実感が得られる**のではないかという境地に至ることができたのです。

担任の時代も、管理職になってからも、ここで表現するのが難しい事案を数多く経験しました。心配で眠れない夜も多くありました。それでも“心の芯”を得たことで、立ち向かう勇気を湧き出だすことができたのです。希望を持って前に進むことができたのです。その結果、より高みへと昇ることができたと思っています。

教育現場で奮闘されている方々も、「どうして私だけに、このような苦しみ・悩みがあるのか」「なぜ私だけが、このような理不尽な目に遭うのか」などと、心が苛まれることがあるかと思います。その時、**「いつの日か出会う誰かのために今の経験が必ず生きてくる」**と信じることで勇気が湧き、前へ進むパワーが出てくると確信します。

“寄り添う” とは、 その人に同苦すること

私が小学校高学年を担任していた頃、職場の人間関係で悩み、苦しみ抜いたことがありました。

――― この試練は、将来、人間関係で悩んでいる誰かと出会った時のためにあるのだ。この試練を乗り越えることで、同じように悩み苦しむ人の気持ちが分かり、寄り添うことができるようになるのだ。“寄り添う”とは同情ではなく、その人に同苦することである ―――

どん底にいる中で、心からそう思いました。

同じ時期、私の学級には友だち関係で悩んでいる子どもがいました。私は担任として、学級内の良好な雰囲気づくりに努め、その子に言葉をかけました。

「今、君が友だちのことで悩み苦しんでいることは、将来、出会う誰かのために意味があることだよ」

「君が強くなって、同じように悩み苦しんでいる子と出会った時に助けてあげることができるのだよ」

同苦し、寄り添いながら言葉をかけたことで、その子の悶々とした心の中に“春風”を送れたと感じました。私自身は出口が見えない極限状態の毎日でしたが、光が差し込んできたような心境になり、心で泣いたことが今でも忘れられません。その後、一進一退を繰り返しながらも、その子にとってより良い方向へと進むことができました。

この出来事を通じて、子どもたちの「乗り越える力」を育むためには、**まず教師自身が「乗り越える力」を身につける必要がある**との思いを深めました。

“待っている 人を心に 大空へ “

私が校長を務めていた小学校の卒業式では、学校長式辞の際、未来に羽ばたく卒業生に次の句を詠み、挨拶の言葉を結びました。

待っている
人を心に
大空へ

卒業する子どもたちへ
以前、 何かの読みものに、 興味ある記事が載っていました。 「細胞一個が偶然に生まれるのは、 １億円の宝くじに連…
続きはこちらから

待っている　人を心に　大空へ
“平穏な日常生活” ――― この言葉が今ほど渇望されている時はないと感じます。 一向に出口の見えないコロナ禍に…
続きはこちらから

卒業証書
「あなたは本校において　小学校の課程を修めましたので　ここに証します」 これは、 小学校卒業式の「卒業証書…
続きはこちらから

誰かがあなたを待っている
厳しい寒さの冬を乗り越えて、 桜が開花し始めています。 コロナ禍でさまざまな制約が課され不自由な思いをされても…
続きはこちらから